

『別府史談会』創立のころ

元別府史談会事務局長 入江 秀 利

別府史談会を創設した昭和六十二年頃の世相は、歴史ブームが起って多くの人々の間に郷土史への関心が高まった時でした。市の文化財調査員で民俗担当の松岡実・小玉洋美、地方史担当の後藤武夫・安部巖・藤内喜六・入江は教育委員会から「べっぶの文化財」、「別府市古文書資料集」を発行していましたが、発行部数や内容の点で一般市民の啓蒙にはほど遠いものでした。また、藤内喜六・入江が中心になって中学校歴史研究会を作り機関誌「往来手形」を出し、教育委員会の「研究紀要」にも郷土学習に資する史料や研究の成果を紹介していましたが、社会科教員に限られたものでした。他方、社会教育課には郷土の歴史に関する問い合わせが頻繁に来るようになりました。

文化財調査員の中では、研究者が地方史の研究や史料を公開し、市井の研究者には発表の場所を提供したい、同好者が一堂に会して交友を深め、専門研究者を招き講演会を催して知識を共有できる組織を作りたい、という切実な希望が話題になっていました。

当市には戦中戦後の郷土史啓蒙ブームにのって、福田紫城を中心にして郷土史の愛好家が、「歴史研究会」、やがて「別府史談会」を立ち上げたのですが、資金の面で休眠状態になっていました。昭和六十年（一九八五年）頃から、旧史談会員の後藤武夫・安部巖・藤内喜六の間で「別府史談会」を再興しようという動きが見られましたが、資金面で具体化できず暗礁に乗り上げていました。

この時、教育委員になられた歯科医師の豊田文一が、藤内喜六から史談会再興の話を聞いて、地方文化の活性化のためにやってみよう、歯科医師会がバックアップします、ということをやっと実現できるめどが立ったのです。